次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（60点）

そもそも、「依存」とは何だろうか。複数の国語辞典を照らしあわせてみると「依存」とは、「他のものに頼って存在していること」であり、そこにネガティブな意味合いは含まれていない。しかし、「他のものに頼る存在」のあり方に対しては、時代ごとに評価が分かれる。同じ集落の隣人の助けがなければ生きられなかった長い時代、依存の状態を問題視することなど考えられなかったであろう。持ちつ持たれつを保っていくことこそ生きることそのものであったに違いない。ところが現代の「依存」には、とかくネガティブなイメージが付きまとう。

A ニュースで見聞きする「依存」の使われ方も、もっぱらネガティブである。病的なニュアンスを含む「～依存症」はもちろん、「中国の一帯一路政策に関するラオスの中国依存」、「マスクを外すと不安になるマスク依存」、「スマホ依存」など、「依存」は避けるべき状況を指す言葉として定着している。

ここで大切なのは、これらのケースでは依存先の選択肢が限られているという点だ。依存先の選択肢が狭く限定されると、人々は逃げ場を失い、与えられた状況に身を任せるしかなくなってしまう。選択肢があるように見えても、今の状態から抜け出すのが困難なこともあるだろう。この場合の「依存」がネガティブにとらえられるのは理解できる。

だが、依存先が一つしかないのではなく、複数のネットワークを形成していると考えればどうだろう。人々は自らの依存先を選べるようになり、争いを助長する組織にそそのかされたり、争いの原因になる他者の蔑視や排除に簡単に加担したりする可能性も低くなるのではないだろうか。そして、これまで「個人の選択」の結果として責任を負わされ、無力感を抱いてきた人も、大きな集団と向き合うコツを心得、仲間を見つけて勇気をもてる場面も増えるのではないだろうか。

ここで私の言う「争わない社会」とは、争いや暴力が皆無の理想郷ではなく、争いの激化を予防する「依存のネットワーク」が張り巡らされた社会である。もともと、西欧で形成された国家の重要な役割は、貴族たちの不規則な暴力行使を規制し、軍隊や警察などを通じた「正統な暴力」の権限を国家に集めることで、市民社会での ① 的な争いの勃発を抑え込むことにあっ

た。ところが、国家が支配を強める過程で生じていたのは、様々な中間集団の解体であり、市民が国家と一対一の関係でつながってしまうという権力の一元化である。そうした中で国家が自ら暴走すれば、無防備な人々は、たやすく権力に絡めとられ、争いに巻き込まれてしまう。

争いの道へと走り出す手前で、権力の集中に歯止めをかける方策を考えなくてはならない。ヒトラーやプーチンが選挙で選ばれたことを考えれば、選挙制度に頼る民主主義では、権力の暴走に十分な手当ができない。だが、たとえ争いの芽を完全に摘むことはできないとしても、争いが重症化する手前で事態を収めることなら、現代の民主主義の枠の中でもできるはずだ。

② 的に対策を講じるよりも、前もって争いを拡大しない社会を築く方法に知恵を集めるのである。

争わない社会に向けて、「依存」にこだわる理由をもう少し掘り下げてみよう。

慶應義塾の創設者である福澤諭吉は、明治時代のベストセラー『学問のすすめ』で「一身独立して一国独立す」という有名な言葉を残し、生まれたばかりの明治国家のあるべき姿を示した。彼は欧米にならって、権威から独立した市民こそ国の礎になると考えたのである。同様の考え方は、やがて遅れて近代化を果たした発展途上国に広く普及していった。だが、この勇ましい掛け声の中で私たちが忘れがちなのは、どのような自立も「何らかの依存関係の組み合わせ」から成り立っているということである。

「依存関係」を細かく分解してみよう。そこにはまず一人の人間が織りなす様々な人間との依存関係がある。そして、それを取り囲むようにして、様々な組織や国家がそれぞれの依存関係にある。そうした依存関係が国家を超えて世界につながっていることは、ウクライナ紛争に端を発するエネルギー価格の高騰で多くの日本人が体感した。対外的な依存を減らせば、経済的な自立を高めることはできるかもしれない。しかし、世界の動向から自分たちだけを切り離すことはできない。依存を忌避する方法ではなく、依存と向き合い、手なずける方法が問われているのである。

依存は外部から持ち込まれることもある。たとえば先進諸国が行う貧しい国々への援助でも、相手国や人々の自立が強調されてきた。B「魚をあげるのではなく、釣り方を教える」ことが自立に向けた支援であると繰り返され、日本の援助業界はこれを「自助努力支援」と呼んできた。だが、釣り方を覚えた人は釣った魚をどうするのだろうか。自分で食べきれない分はおそらく市場

に売ることになる。「自立した」釣り人は、こうして市場と貨幣の世界への依存を強めていく。

このように、一見「自立」に見えるものが実は依存先の変更に過ぎないのだとすれば、私たちはなぜその事実に気づくことなく、依存を嫌い、自立を崇(あが)め続けるのだろう。

近代以降の社会における競争や自立の強調が「依存」を遠ざけてきたのには、いくつか理由が考えられる。他者に依存する「弱み」を自覚したくない人間心理も一つの要因であろう。年金や福祉の面で国家が個人の生計に影響を及ぼす範囲が拡大してきたこともある。あるいは、個々人が社会の分業や競争に取り込まれていく中で、「仕事」が生活全体を支配し、周りの人間に頼るという行為をその範囲においてしか意識できなくなってしまったからかもしれない。

現実世界では、誰しも、頼る先を変えながら人生を歩む。赤ん坊として生まれた人間は、親に守られて成長し、学校では友人に、職場では同僚に、家庭では妻や夫に頼りながら年を重ねていく。病院の医師に頼って生涯を終える人も多いであろう。かつて助けられた人は、どこかの段階で助ける側に回り、助けた者は助けられる者になる。このように考えると、依存関係は複数に広がっていて、そこには時間を超えて循環する側面があることも分かる。

C 近代化に伴う個人主義の蔓(まん)延と、依存関係の重層化は表裏一体である。だが、依存の大部分は無意識の領域に属するために後景に追いやられ、代わりに［③］的、主体的な行為である競争と協力が意識されてきた。ここで「無意識に築かれてきた依存のネットワークこそが自立の役に立ってきた」という主張をしてみたところで、個人の自由意志を重んじる近代社会においてはいかにも頼りなく聞こえてしまう。しかし、ひとたび自立の土台に目を向けると、そこにある依存関係のあり方が、争いに至る可能性を左右していることが見えてくる。

依存のネットワークは時間と共に形を変える。D 依存関係という視点は、その意味で、歴史をどう見るかということにもかかわってくる。歴史の流れは、「建国の父」や「革命の英雄」らがつくり出してきたものではない。長編小説『戦争と平和』で知られるロシアの文豪レフ・トルストイはそう結論した。歴史の主人公として登場する軍人や政治家は、権威のピラミッドの中で高く位置しているほど、その基礎となる普通の人々から遠く離れざるをえない。しかし、現場で実際に歴史を動かすのは、これら普通

の人々ではないか、とトルストイは考えた。ピラミッドが大きくなるほど、頂点を下支えしている土台は忘れられてしまう。これが、いわゆる「トルストイの逆説」である。

今回私が試みたのは、この逆説をヒントに、国家と諸個人の「関係」に注目することである。トルストイは、歴史の底流に、歴史に名前を残さない人々の姿を見た。私は「統治する者／される者」という二項対立的な発想を超えて、多様な人間がお互いの関係性を組み上げる様子を「依存関係」というキーワードで捉えてみたい。

東洋史学者である宮崎市定（いちさだ）がこんな言葉を遺している。

> いやしくも自己の記録をもつようになった文化民族ないし国家は、たがいに交通という紐帯（ちゅう）によって緊密に結びつけられている。そして相互に啓発しあい、競争しあい、援助しあいながら発展してきたのである。ちょうど、スギナとツクシとが地面の上ではまったく違った形を現わしながら、地下では共通の根を持っているようなものである。

私はこの一節を読んで、宮崎の言う「援助しあいながら発展してきた」という部分に、自分のこれまでの研究の焦点が合わせられていたことにハタと気づいた。これまでの研究から分かってきたのは、近代化や開発を推し進める競争や自立は、特定個人の選択肢を増やしながらも格差や不平等と表裏の関係にあること、貧困や環境破壊といった開発の副産物を手当てするはずの「援助」の背景にも様々な政治的思惑があることであった。私に欠けていたのは、まさにスギナとツクシが地下で共有の根をもっているかもしれないという想像力だった。

「地面の上」だけを見ていては物事の本質が分からない。このことを最初に教えてくれたのは、私の調査地であるタイ中西部の焼畑農民たちである。畑や森に火を放つ焼畑移動耕作は、その瞬間だけを切り出せば、周囲の自然環境を破壊しているように見える。しかし、数十年のサイクルで見てみれば、地味が回復した場所に再び戻っていく移動式耕作は、むしろ自然環境に適した農法である。

私たちが教わってきた近現代史は、自己と他者の違いを強調する視点に偏ってきた。その結果、宮崎の言う「共通の根」にある文化や経済が互いにどのように抜き差しならぬ依存関係にあったのか、という視点が忘却されてきたのである。「依存」は本来中立であるならば、取り返しのつかない争いへと向かわせる依存関係とはどのようなものか。

（佐藤仁『争わない社会　「開かれた依存関係」をつくる』による。ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。）

問1　傍線部A「ニュースで見聞きする「依存」の使われ方も、もっぱらネガティブである」とあるが、現代のニュースではなぜ「依存」をネガティブに使うのか、その理由を八十字以内で説明しなさい。

問2　空欄①～③に入る最も適当な言葉を次の（ア）～（キ）から選び記号で答えなさい。

（ア）社会　（イ）神話　（ウ）意図　（エ）偶発　（オ）必然　（カ）事後　（キ）一般

問3　傍線部B「魚をあげるのではなく、釣り方を教える」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問4　傍線部C「近代化に伴う個人主義の蔓延と、依存関係の重層化は表裏一体である」とはどういうことか、説明しなさい。

問5　傍線部D「依存関係という視点は、その意味で、歴史をどう見るかということにもかかわってくる」とあるが、依存関係という視点を持ち込むことで、歴史をどう見ることができるのか、説明しなさい。

問6　傍線部E「スギナとツクシが地下で共有の根をもっているかもしれないという想像力」とあるが、それはどういう想像力を意味するのか、本文全体の論旨を踏まえて説明しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（60点）

狩猟採集時代の集団では、密な協力が特徴となっていた。小グループに分かれて狩猟に出かけ、とれた獲物は皆で分けて食べる。木の実が熟す時期になれば大勢で採集に出かけ、集めた木の実もまた分配するという生活だったようだ。仕事を効率的に進めるために、集団のメンバーには役割分担があったにちがいない。たとえば、腕力が強い者は狩猟のときのやり投げ担当、目が利く者は捕食動物が襲ってこないかを監視する採集時の見張り役、といった具合である。

こうした集団では、そこに生まれ育つ子どもが「何が得意で、何の仕事をうまくこなしてくれるか」をいち早く見きわめて、その仕事を担当させるのがよい。逆に、子どもの側からすると、自分が得意であることを認識して、担当できる仕事を申し出るのがよい。うまく仕事ができて大人たちから認められれば、早々と大人の仲間入りなのだ。

A この協力集団の環境が、私たちに特有の感情や欲求を進化させたのである。「自分には集団に欠くことができない仕事を担当できる力がある」と思う自己肯定感、そうした仕事を担当できるとアピールして、周りの人々からの承認を求めようとする欲求である。任された仕事をうまくこなすことができれば、最後に達成感と満足感が得られるわけだ。協力集団に属することが生き残るうえで不可欠だった時代ならではの事情が、私たちの行動を方向づけたのである。

この一連の過程に〝フェイク〟が侵入してくる。「仕事を担当できる力はいまひとつだな」と自分でうすうす思っていても、「担当できる」と意欲的にアピールしてしまうのだ。すると、周りの人々も「そんなに言うのなら」と、〝フェイク〟にだまされたつもりになって任せてみる。その結果、いくぶん失敗を重ねるかもしれないが格好の練習になり、一人前になるまでに仕事が上達するのである。

こうして、B〝フェイク〟が本当になっていく。これは「予言の自己成就」と呼ばれ、私たちがときどき達成の難しい目標に挑み続けるときに使うテクニックである。

たとえば、難しい課題に挑戦するときに「一カ月で跳び箱一〇段跳んで見せる！」などと、周囲の皆に公言することがそれにあ

たる。いったんアピールした事柄は、達成する社会的な責任を伴う。達成できなければ「口先だけの奴だから、信用するのはやめておこう」と思われてしまう。その責任感から、なんとしても達成しなければという意欲が湧き、つらい練習も続けられるのだ。

よく考えると、この課題挑戦を始めるには、「自分には、跳び箱一〇段跳べる素質がある」と信じる必要がある。素質がある根拠が何もない状態でも、それを漠然と信じなければ始まらないのである。これが自己欺瞞の必要な理由である。

協力集団にはいろいろな仕事があり、それぞれの仕事をこなす人を誰かに割り当てなければならない。普通に考えれば、やったこともない仕事には自信が持てず、やりたくないと思うのが当然である。しかしそれでは協力集団は成り立たない。

私たちは、集団の長老の「君なら大丈夫。絶対できるから、自分を信じるんだ」という言葉に共感して、自信を持てるようになり、協力集団形成に成功してきた。さらに私たちは、自分自身を鼓舞して、未知の仕事でも率先して挑戦できるほど、自己肯定感を高く維持できるようにも進化した。C その背景では、自己欺瞞が一役買っているわけだ。本心では「できそうにもないな」と思っていては意気込みに欠けてしまうし、大人たちから本心を見透かされてしまう。心から「できそうだ」と思う自己欺瞞が必要だったのである。

D 自己欺瞞が現代でもきわめて一般的であることは、次のような肯定的なスキルを問う質問の回答からも明らかになっている。たとえば「あなたの親切さは平均以上ですか」とか、「あなたは平均以上の速さで歩いていますか」などと質問した結果を集計すると、平均以上と回答する傾向が七割以上になる。

平均は五割なので、二割以上の人々が、平均未満にとどまっているはずなのに「自分は平均以上である」と答えていることになる。これを楽観的な人々が集まる村が登場する作品にちなんで「レイク・ウォビゴン効果」(注) と言う。

E 現代社会の生活は狩猟採集時代とは大きく様変わりしている。それでも私たちが自己欺瞞の習慣を維持しているのは、どのような理由からだろうか。

前に述べたように、狩猟採集時代に自己欺瞞が必要であった理由は、協力集団の一員として受け入れられる承認欲求からであった。考えてみると、かりに協力集団の一員として受け入れられれば、自己欺瞞の必要性はそれほど高くない。抜きん出た成果

をあげるとアピールしなくとも、自分の実力は周りの人に知られているし、そもそも協力集団内ではある程度の食べ物は分配されるので、抜きん出た成果は必要ないのである。また、年をとれば、若者に仕事を譲っていくものであるから、見栄を張る必要もない。

こうしてみると、文明社会では狩猟採集時代のような密な協力集団が希薄になっていることに思い至る。基本的な生活を支える協力集団が周囲になければ、狩猟採集時代のような形では私たちの承認欲求は満たされない。よく言う「居場所がない」という状況はその承認欲求不全のひとつの現れだろう。そこで現代では、お金を稼ぐことで基本的な生活を支え、何らかの人間的なつながりを築くことで別途承認欲求を満たしているようだ。

ところが、お金を稼ぐことが個人的な営みになっている文明社会では、周囲の人々との競争関係が生じやすい。すると、「自己肯定感を高めてアピールし、周囲の承認を得る」という一連の活動が、旧来は協力集団の一員になるための成人への過程であったものが、現代では、一生を通じての仕事上の活動原理となりがちなのだ。一流の企業経営者になるには「ハングリー精神を持って挑戦し続けよ」と言われる背景には、市場原理にもとづく現代の文明社会が、狩猟採集時代の成人化パワーを必要としている実態がかいま見える。これでは、生涯にわたって「自己欺瞞を保って、根拠の薄い自分の能力を主張せよ」と言われているようなものである。

とくに、「自尊心を高めよ」「アイデンティティを確立せよ」というスローガンには、気をつけたほうがよい。どちらも、不必要に自己欺瞞を高める負の効果がある。

自尊心が高まれば、自分には能力があると信じられ、自信がつくのと引き換えに、スキルを磨く努力がおろそかになる。アイデンティティが確立すれば、自分の行動スタイルが固定化するのと引き換えに、新しい状況に合わせていく気概がおろそかになるのだ。

アイデンティティや自分らしさは、もともと生まれ育った協力集団へのアピール材料であった。「自分のできる仕事はこれ」と表明して承認を得る手段であり、仕事のスキルを磨く責任を伴った小さな自己欺瞞の発揮でもあった。

ところが、協力集団が希薄になった現代社会では、むしろ複数の集団に所属して、いろいろな人々と関わる生活が奨励されるようになっている。[F]こうした状況でアイデンティティを模索すると、どの集団に所属する自分も自分らしく思えず、集団と関わるそれぞれの自分が仮の演技をしているように感じられる。現代では、アイデンティティを維持するには、集団ごとの数多くの自己欺瞞が不可欠になり、混乱して自分を見失ってしまう。もはやアイデンティティの確立に固執しないほうがよさそうだ。

（石川幹人『だからフェイクにだまされる――進化心理学から読み解く』による。ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。）

（注）　心理学の用語。

問1　傍線部A「この協力集団の環境が、私たちに特有の感情や欲求を進化させた」とあるが、具体的にはどういうことか、八十字以内で説明しなさい。

問2　傍線部B「〝フェイク〟が本当になっていく」とあるが、そうなるための前提条件について説明しなさい。

問3　傍線部C「その背景では、自己欺瞞が一役買っているわけだ」とあるが、具体的にはどういうことか、説明しなさい。

問4　傍線部D「自己欺瞞が現代でもきわめて一般的であることは、次のような肯定的なスキルを問う質問の回答からも明らかになっている」とあるが、「あなたの不親切さは平均以上ですか」という否定的な要素を問う質問をした場合、本文の論旨からどのようになると推論されるか、説明しなさい。

問5　傍線部E「現代社会の生活は狩猟採集時代とは大きく様変わりしている。それでも私たちが自己欺瞞の習慣を維持しているのは、どのような理由からだろうか」とあるが、その「理由」を説明しなさい。

問6　傍線部F「こうした状況でアイデンティティを模索すると、どの集団に所属する自分も自分らしく思えず、集団と関わるそれぞれの自分が仮の演技をしているように感じられる」とあるが、それはなぜか、説明しなさい。